

# 平成 26 年度（2014 年度）セタシジミ種苗放流結果と生息状況

磯田 能年・石崎 大介

## 1. 目的

南湖はかつてセタシジミ漁業が盛んであったが、砂地の減少や水草の繁茂などにより現在ではほとんどセタシジミ漁業が行われていない。そこで、県では湖底耕耘や覆砂による漁場の再生を行っており、あわせてセタシジミの仔稚貝の種苗放流を実施している。その放流効果を検証するため生息状況を調査した。

## 2. 方法

橋本・井戸本（1996）の方法にしたがい、琵琶湖北湖で採捕した親貝を用いて、D 型仔貝を生産し、それを用いて久米（2009）の方法に従い殻長約 300  $\mu\text{m}$  まで育成した。生産個体は平成 26 年 7 月 9 日から 10 月 16 日に順次、船上からホースと鉄管を用いて平成 25 年度覆砂区（5.5ha）（図 1）の水深約 3 m に放流した。なお平成 21 年は耕耘区に約 10 億個体、平成 20 年度覆砂区に約 1 億個体、平成 22 年は耕耘区に約 10.1 億個体、平成 21 年度覆砂区に約 1 億個体、平成 23 年は耕耘区に 10.3 億個体、平成 22 年度覆砂区に 1.1 億個体、平成 24 年は平成 23 年度覆砂区に育成稚貝 616 万個体および D 型仔貝 2.9 億個体、平成 25

年は平成 24 年度覆砂区に育成稚貝 946 万個体を放流した。また南北各耕耘区の南部には平成 18 年から放流が行われている。南北耕耘区の 3 地点、平成 20～平成 25 年度覆砂区、南北耕耘区の中間の耕耘区外において平成 27 年 2 月 17 日にエクマンバージ採泥器により稚貝の生息状況を調査した。また、上記調査地点に北耕耘区の北側（北外）、南耕耘区南側の耕耘区外（南外）を加えた地点において、3 月 27 日に噴流式小型定量桁網（以下：桁網）により殻長 18mm 以上のシジミの生息状況を調査した。エクマンバージで採捕（各点 3 回）した個体は目合い 710、1,000、2,000  $\mu\text{m}$  の篩にかけた後、底質から選別して計数し、マンガンおよび桁網で採捕した個体は殻長を計測して生息密度を求めた。なお、実際の漁具での調査では各地点 3 回曳網し、平均生息密度を求めた。

## 3. 結果

殻長約 300  $\mu\text{m}$  育成稚貝を 1,180 万個体放流した。

エクマンバージによる調査では耕耘区の北 2、南 3、覆砂区の H22 岸で比較的高い密度で

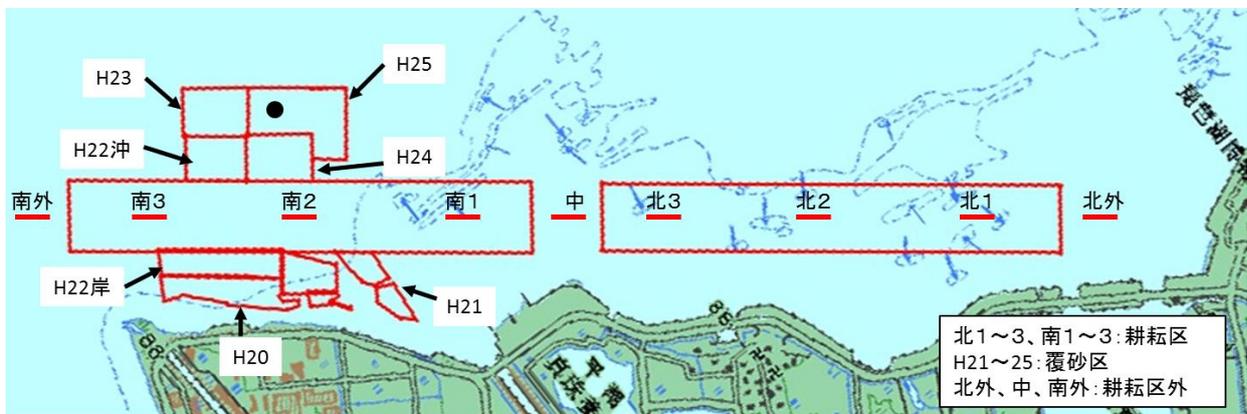


図1 セタシジミの種苗放流地点(●は今年度の放流地点)および調査地点

引用文献：橋本・井戸本（1996）滋賀県水産試験場研究報告 第 45 号  
久米（2009）平成 21 年度滋賀県水産試験場事業報告

生息していた（図 2）。平成 26 年度の調査と比較すると上記以外の調査地点では、生息密度が減少していた（図 3）。平成 26 年度は南湖において水草が多量に繁茂しており、稚貝の生息環境が悪化していた可能性がある。今後は、水草の繁茂状況とシジミ仔稚貝の発生状況の関係を明らかにする必要がある。

桁網による調査では南耕耘区の中中部（南 2）から南部（南 3）において高い密度で殻長 18mm 以上のシジミが生息していた（図 4）。南耕耘区南部（南 3）では昨年より減少したものの、中中部（南 2）では昨年より増加した。南耕耘区で生息密度が高い傾向は例年同様であった。また、近隣の耕耘区外では生息密度が低いことは昨年と同様であり、耕耘によるシジミの生息環境改善効果があったと考えられる。

また、この調査においても耕耘区外では殻長 18mm 以上のシジミの単位面積当たりの採捕量は低く、シジミ増殖に耕耘が効果的であるとされる。

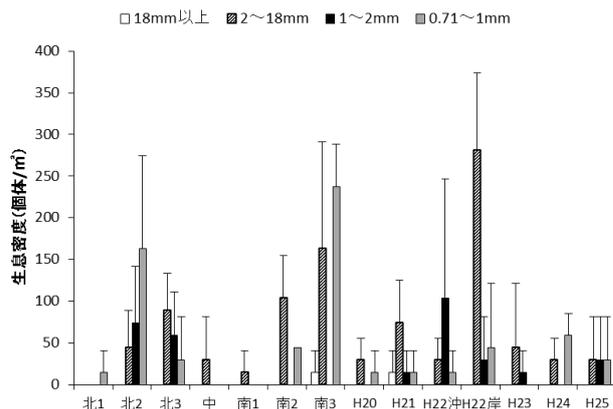


図 2 シジミ稚貝の生息密度

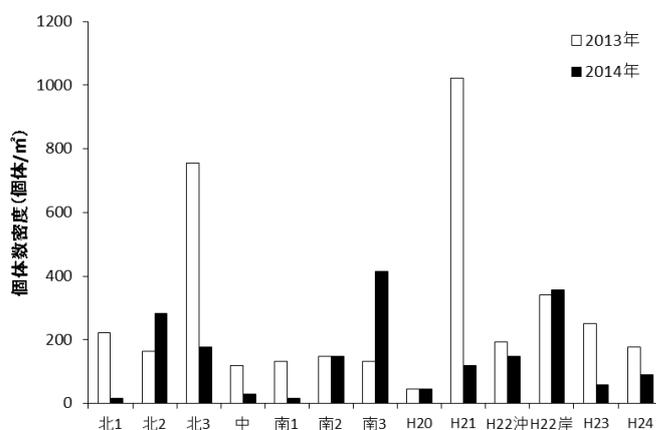


図 3 シジミ稚貝の総生息密度の推移

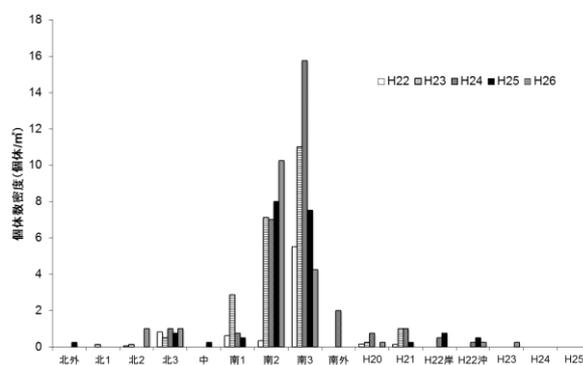


図 4 殻長 18mm 以上のシジミの生息密度